

—— 日本鋼管の94連勝 ——

今から半世紀ほど前の昭和20年代に男子バスケットボールで、とてつもなく強いチームがあった。そのチームは現在のJFEスチール会社の前身であった日本鋼管である。

連勝記録は97連勝とも94連勝とも言われ、当時のバスケットボール界では大変な評判だった。連勝の数は以下をお読みいただいた読者の判断にまかせるが、連勝記録の90以上は記録的なことである。当時は毎月2～3試合を行ったとしても年間30試合程度しか試合数をこなすことができないから、単純に計算すれば3年間負けがなかったということになる。余程の強豪チームでも3年間負けなしというわけにはいかないのがバスケットの世界。

今回はそんな連勝記録にスポットを当てて、当時、日本鋼管の選手でもあった池田博氏にインタビューを行いまとめてみた。

担当：歴史部



池田博氏
いけだひろし

《略歴》

大正11年(1922)東京都生まれ、番町小学校から当時東京府が新設開校した中高一貫教育の7年制「府立高校」へ。
東大工学部卒業後、海軍航空技術廠、東京工大精密機械研究所を経て昭和24年(1949)日本鋼管に入社

【上谷】

本日は歴史部会として、日本バスケットボール界の連勝、つまり勝ち続けるというテーマで『日本鋼管の94連勝』を取り上げてみました。当時、現役として、また中心的名プレイヤーであった池田さんから、当時の状況、そしてどのように努力して来られたのか生の声をお聞きしたいと思います。

司会は島本さんをお願いします。

【島本】

本日はお忙しい中、お時間を作っていただき有難うございます。私と池田さんとのかわりには、月刊バスケットボール誌創刊当初、毎日新聞の記者をしておられた河合武さんを通じて、お会いした記憶があります。

【池田】

私も覚えています。河合君は東大バスケット部の後輩でした。

【島本】

早速本題に入らせていただきますが、日本鋼管に入社されたのはいつごろですか？

【池田】

半世紀も前の話ですね。終戦から、しばらく経った、昭和24年3月です。

【手嶋】

日本鋼管に入るまでは、どうされていたのですか？

【池田】

大学2年から3年にかけて、戦況が悪化し、いつ召集令状が届くか分からない状況になったので、“海軍委託学生”を志願して学業継続の保証を得ました。しかし昭和19年9月に繰上げ卒業となり『浜名海兵団』で5年間士官教育を受けた後、技術中尉として、逗子の航空技術廠に配属となりました。ほぼ半

年で終戦を迎え、海軍は解散となってしまったのです。そして、終戦後、兄のついでで東京工大の精密機械研究所を紹介され所長にお会いしました。正式には、『研究助手』になるのですが、既に定員が一杯なので「私のプライベートの研究助手」では、どうかとおっしゃっていただきました。ありがたくお願いして、前任者5名の助手と一緒に自分の好きな研究をしていました。その頃、復員者が次第に増えてきて、神保町の国民体育館のコートで7大学OBリーグが再開となり、バスケットを楽しめるようになりました。そんな時（昭和23年）横山堅七さんから日本鋼管（当時川崎製鉄所）と一緒にバスケットをやらないかと誘われました。しかし、今の生活に満足しているので、とお断りしました。ところが、『軍籍』にあったものは、公務員から追放する。『新たな任官はみとめない』という、いわゆる公職追放制度が現実味を帯びてきました。研究所の仲間も、1人、2人と辞める者が出てきましたのでOBリーグで横山さんにお会いしたとき就職の打診をしたところ、「任せておけ、できれば、明日来られないか」とのお話をいただき、翌日たずねていったらまず秘書室へ。「所長に話をしているから人事へ行きなさい」というので人事に行ったら「履歴書持参でいつからでも来なさい」とのことでした。

持つべきものは、よき先輩だと思つづくことでした。3年半お世話になった研究所の所長もこころよく賛成してくださったので昭和24年3月14日に入社しました。

【手嶋】

横山さんは、昭和23年に新潟から、高橋修さん、山岸さんを誘っていますね。

【池田】

この2人は鉄興社からさそわれて上京し、郷里の大先輩である横山さんに挨拶に行ったところ「鉄興社には、話をつけてやるから、俺の所に来い」と言われて日本鋼管に入社したと聞いています。横山さん

はいい意味ですごく強引なところがありました。

【手嶋】

引き続き、シベリアから復員してきた早大OBの白神さんが横山さんを頼って入社されました。池田さんが入られた4月には明大新卒の高橋実さんも入社して、F／横山、高橋弟。C／高橋兄、山岸。G／白神、池田。とバランスのとれた強力チームがあつたという間に誕生しました。

【上谷】

そのメンバーで練習はどのようにしていたのですか？

【池田】

それをお話する前に入社して驚いたのは、広い構内のどこにもバスケットコートらしきものがなかったことです。あつたのは、本部事務所の脇に土に砂をまぜてローラーで固めたハーフコートにお手製のゴールポストが1基と、フリースローラインが1本あるだけでした。とても練習には使えませんが食堂の近くなので昼休みには、なんとなく集まってきて顔あわせをしていました。本物の練習はマネージャーが探し当てた小学校のコートなどを半分つかわせて貰うのが、精一杯でした。ゲーム、即、練習でいくしかなく、間もなく始まった『川崎市民大会』『神奈川県選手権』『アイケル・バーガー杯』などに参加しました。ゲームを通じて各人が従来の所属チームでのプレーを脱却し（このチーム）の中でやるべきプレーと、やってはいけないプレーをお互いに理解できてきたのが収穫でした。そして、前年昇格したばかりの関東実連1部リーグに出場し、名だたる強豪をくだして全勝優勝をとげ、連勝記録のスタートを切りました。6月の全日本実業団選手権は、創部10年にして初めての『全日本』という名のつく大会への出場でした。会場は進駐軍の好意で提供された（フライヤージム・ヨコハマ）という素敵な大コートで神奈川県民の大声援をうけて、奮起一番、見事

に優勝をかざりました。これで、一躍『急変身をとげた鋼管バスケット部』の名がひろがり、練習コートも気安く貸してもらえようになり、大変助かったことを思い出します。残るは正月のオールジャパンのみとなり、構内にあった戦時中、徴用工の宿舎であった空き家を借りて、初めての合宿をおこないました。午後5時の終業後、社内食を食べて明大のコートで試合をし、帰り着くのが、9時ごろになりました。部屋に戻るとジャン卓を囲む者、風呂上りに一杯始める者など……、明日の出勤時間を考える者ゼロという、若さあふれる集団でした。ところが、その宿舎は長期間空き家であったのでノミ、シラミがあばれだし、この合宿は数日間に取り止めになりました。結果的にはこれがよかったのかもしれませんが…。

【 上谷 】

天皇杯を獲得した決勝戦の相手は全文理（筑波大の前身）で2度の延長戦の大接戦でした。会場は当時東洋一とうたわれた、芝公園の日活スポーツセンターで高松宮殿下を始め、15,000人の大観衆が観戦したと記録されていますね。

【 池田 】

当時の試合は神保町の国民体育館や、駿河台の明大体育館など小さな会場でいずれも正規の観覧席がなく、2,000人位で満員でしたが、バスケットの人気は大変なものでした。天皇杯の試合の様子はNHKラジオで全国放送されたそうです。過去全日本のタイトルは学生チームやクラブチームによって独占され、実業団チームは手が届かなかったのですが、日本鋼管が初めて獲得したことを知り、全従業員が沸きかえりました。戦争中の爆撃から立ち直りつつあった若い作業員たちが、俺たちだってやれば出来るんだと、自信とやる気を出してくれたのが嬉しかったです。

【 上谷 】

昭和26年ごろになるとまた学生陣が力をつけてきたようですね。

【 池田 】

2回目の天皇杯決勝の相手は、慶応義塾大でした。立教大、東京教育大、早稲田大なども次々に台頭してきて実業団と競い合う時代へとつながっていきます。

【 島本 】

日本鋼管連勝の原動力が、リーダーである横山さんを中心に、メンバーが互いに切磋琢磨し、強力な団結力の賜物だということがよく理解できました。

【 池田 】

さらに、会社を挙げてバスケット部を応援してくれたことも大きな力になりました。社内のバスケット大会では、32にも及ぶ部署がチームをつくって参加し盛り上がったものでした。

【 従野 】

池田さんの高く跳びあがったジャンプシュートは当時憧れの的でした。

【 黒川 】

鋼管の得点源でした。飛び上って滞空時間があり、一緒に飛び上がったディフェンスが先に落ちていました。ジャンプ力は抜群でした。

【 島本 】

それは、どのようにして会得されたのですか？

【 池田 】

7年生高校の4年の夏でした。合宿練習が終わってグラウンドに出て涼んでいたときのことです。このままバスケットを続けるなら、オリンピックに参加できるようにしたい。どうやったら外人との身長

ハンディを克服できるかを考えました。それには、高く跳んで打つジャンプシュートしかないと考えました。早速、近くにあった陸上競技部の走り高跳び台を使って跳んでみました。(当時は現在と異なり正面跳びでした) 少しずつコツが分かり、身長の高さをクリアーできるようになりました。嬉しかったです。しかしハイジャンプは跳んで砂場に落ちればOKですが、バスケットの技術とは同一視できないことに気づき、ハイジャンプは踏み切りのコツやバネの強化にしばらく、やはりコートでボールを使って練習することにしました。練習のイメージとしては、つぎの3点を心がけました。

- ① 短く早いドリブルの後、強く真上に踏み切る
- ② 両腕は肘を曲げずに真上に伸ばす
- ③ 両手首と掌・指のスナップを使ってシュートする。

合宿がおわった後も、時々学校に出かけてトライしました。仲のよかった部員が付きあってくれて、手伝いながら色々アドバイスしてくれたのが大変役に立ったことを感謝しております。真上に跳んで体の慣性で前方に流れるから、ディフェンスに近づかないように後ろに向かって踏み切る意識に変えました。ハイジャンプの練習は跳躍力強化のため、卒業まで続けました。1年に10cm近く伸び3年ごろはつねに身長の高さをクリアーすることに挑み、卒業のとき最高の173cmを跳ぶことができました。

【黒川】

池田さんは両手でジャンプシュートをしていましたね。

【池田】

高等科に進んでからですが、夏休みにジャンプシュートの練習を長く続けると疲れて高く跳べなくなってきました。休憩の時、遊びのつもりで片手でやってみたら楽に打って確率も悪くない。早いタイミングでシュートに持ち込めるから助走して高く飛び上

がる必要がなさそうだと感じました。先輩のコーチに話したら、両手でもあまり入らないのに片手は無理だと一蹴されてしまいました。あの時ワンハンドを続けていたら日本でワンハンドジャンプシュートを創設した歴史的な人物になっていたでしょう……。(笑い)

【島本】

アメリカで最初にワンハンドのシュートをしたのがスタンフォード大学のハンク・ルイゼッティという選手です。彼も池田さんと同じように、両手よりも片手の方が楽に投げられるとコーチに言ったら、それを認められワンハンドシュートの考案者となりました。

【池田】

日米の違いですね。疲れてくると両手のシュートは難しくなります。

【日比野】

当時、東洋高圧の八谷さんもコーナーから片手で投げていましたね。

【池田】

八谷さんはジャンプシュートではなかったですね。片手を利かせていましたが、足は床についていました。

【黒川】

日本でワンハンドシュートが普及したのはハワイのチームが来日してからだと認識していますが。

【池田】

その通りだと思います。

【手嶋】

さて、池田さんはどのようなキッカケでバスケットを始められたのですか？

【池田】

麴町区（現千代田区）の番町小学校で6年生に進んだ時、体育の先生として清水英樹先生が着任されました。この先生が、誰も使っていない講堂の壁についていたバスケットボールのゴールを使って手ほどきをしてくれました。秋に初めての麴町区の小学生大会が行われた時、当時チビ助であったのに選手に選ばれてチームプレイを教えられ、ダントツで優勝しました。これがバスケに嵌り生涯ガードになったキッカケです。

【手嶋】

最後に現在のバスケットに対する、ご意見を伺いたいのですが。昨年の世界選手権もご覧になってますね？

【池田】

今の時代では、プロができなければ日本のバスケットは強くないと思います。一番のポイントはそこにあると思います。

【手嶋】

昨年日本で開催された世界選手権を見て、世界の流れが攻撃的防御をやっていると感じました。オフenseは1対1や2対2の攻撃が中心でしたね。

【島本】

非常にシンプルでしたね。最強と言われたアメリカが勝てなかったのは、やはりチームとしての練習時間が少なく、十分機能していなかったことが原因だと思います。また、東京オリンピック以来、42年ぶりに世界の大会を日本で開催したことは、きちんと評価しなければいけないと思います。この機会を的確に捉え、日本のバスケットが飛躍することを願って、インタビューを終らせていただきます。

池田さん貴重なお話をお聞かせいただき、どうも、有難うございました。

【後記】

日本鋼管バスケット部60年史に畑龍雄さんが（雑感日本鋼管）として、次のような一文を寄稿しています。

『単に強かったというだけでなく、最も気品のあるチームで有り続けている。この点こそ日本鋼管チームの最高の誇りであろうと』2年あまりにわたって勝ち続けたチームを表すに相応しい言葉だと思われます。戦後間もない時代に横山さんのもとに結集したバスケットボールの俊英たちが、強い結束力と誇りをもってバスケットコートに情熱をそそいだ姿を知ることが出来ました。

わが国バスケット界のバックボーンである、日本鋼管（その後NKK）の歴史はこうした先輩たちのたゆまぬ努力によって築かれたことを記録することができたことに喜びを感じます。池田さん所有のスクラップも貴重な資料であることも付記しておきます。

（上谷富彦）

【補足】

清水英樹先生は、その頃の文部省が新たに定めた『小学校の体育専門教師』の第1号で最初に赴任したのが番町小学校だったそうです。

後に東京都の体育協会副会長、都バスケット協会理事長や関東実連の理事などを歴任され、知らぬ間にお世話になっていたことを、振興会におられる長男の清水英邦さんから伺いました。

私にとって忘れられない先生でしたが、先生がチビ助をおぼえておられたはずもなく昔のお礼を申し上げる機会を失ったことは残念で堪りません。

謹んでご冥福をお祈りするばかりです。

（池田 博）